

徳橋達典 提出 学位申請論文

『吉川神道思想の研究―吉川惟足の神代卷解釈をめぐる―』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、江戸時代初期に活躍した吉川惟足（一六一六～一六九四）が、『日本書紀』神代卷を拠り所に神道信仰の内実を構築しようとした、思想的営みについて論じたものである。商人であった惟足は和歌に興味をもち、歌学を通して神道古典に触れ、神道古典の解釈に辛苦。良き師を求め、吉田神道の道統者・萩原兼従の下に学び、吉田神道の最高奥秘・神籬磐境の伝を授与される。その後、『日本書紀』神代卷を典拠に神道思想を構築。武士達の間で学問が興隆した時代状況の中で、惟足は保科正之や徳川頼宣等諸大名に招かれて、時代に適応した神

道論を説く。とくに保科正之や彼を主君とする会津藩に多大な影響を与えた。晩年惟足は徳川幕府の初代神道方となり、神道に関する諮問に答える家となる。

惟足の神道思想を神代卷の解釈を中心に考察しようとする本論文は、以下のよ
うな構成になっている。「序章」「第一章 吉川惟足の『日本書紀』尊重論」「第
二章 吉川惟足の混沌と未生已生論―神代卷冒頭の解釈について―」「第三章
吉川惟足の道統継承問題の再考察」「第四章 吉川惟足の葬祭論の一考察―保科
正之の神葬祭をめぐる―」「第五章 吉川惟足における神籬磐境の伝の要諦」
「第六章 吉川惟足の八雲神詠理解と詠歌に関する一考察」「第七章 吉川惟足
の神語の理解と詠歌」「第八章 吉川惟足と山崎闇斎の神代卷解釈の相違につ
いての一考察」「第九章 吉川惟足に見る中世と近世神道思想の端境期」「終章」
「付記」

次に各章の要旨を、簡略に述べてみたい。「序章」において論者は、惟足を吉
田神道の道統継承者であると同時に、国家統治のあり方を究明する吉川神道の提

唱者であることよって、中世と近世神道思想の端境期にあった思想家として位置づける。続いて本論文の副題「吉川惟足の神代巻解釈をめぐる」に係る各章との関係を論じているので、その概要を述べると。惟足の神道思想形成の根本は、「道」を探究することであり、その拠り所は『日本書紀』神代巻を最重要書とした。つまり人間の生き方や国家統治のあり方は、神代巻に記述された神々の事績から把握しようとしたという。そのような神代巻尊重の態度は、有名な返伝授不履行事件にもみられ、「惟足の神代巻講談や秘伝伝授の手続きを軽視し、道統継承における神代巻の価値共有を拒絶し続けた吉田家との姿勢の違いが主因」と主張。また江戸時代仏式葬儀が強制された中で、四代将軍の後見人・保科正之の葬儀を神道式で執行した惟足の拠り所も「神代巻・四神出生章・第五の一書に記された葬祭」であったという。続いて神代巻第二の一書にみられる高皇産霊尊の神籬磐境の神勅について、従来の学説に言及し結論として、その「要諦を忠君とはせず、高皇産霊の神勅に基づく皇孫のための奉斎、畢竟するに天下太平の祈

りとして解釈し得た」と説いている。更に惟足は儒学の用語を多用することが問題とされるが、同時に神代巻に記された神々の名や歌に注目し、八雲神詠を手掛りに歌の役割について考察。その結果惟足は、四重奥秘に次ぐ三事伝に和歌の秘伝を配置したこと。歌は神々と人間と相互伝達や交流に役立つこと。および惟足が人生の節目に示した詠歌や八雲神詠の解釈を依拠とする思想形成の展開などを指摘する。

以上のように論者は、神代巻の解釈を通して惟足の思想的営みを考究した。なお序章後半には、第二次世界大戦前から今日における先行研究の詳細な紹介を記載している。

第一章は、惟足の神道信仰の拠り所となる古典観を考察。惟足は修身齐家治国平天下の道を探究するための最上の書として、『日本書紀』を位置づけ尊重した。また惟足の「漢字の訓、仮名を尊重し、日本古来の発想を重視する古典解釈方法論」からみて、本居宣長のそれと類似していると主張。しかし同時に吉田家

の古典觀を墨守する惟足は、根本枝葉花実説を根拠に、時代思潮であった儒教的概念を神道思想に関連づけることが多々あったと結ぶ。

第二章は神代卷の冒頭「古天地未剖。陰陽不分。渾沌如鷄子。∴。」の「混沌」の解釈について考察。惟足の解釈の特色は、「未生已生論」を採用した点にあったことを指摘する。一方惟足の神道思想には太極や理気など儒教的概念を用いたため「宋学の亜流」という批判があるが、惟足はあくまで神道古典に依拠した神々信仰に基づいた言説であって、その内実は儒学の盛んな時代に適合した神道神学的意義があったと主張している。

第三章は、惟足の道統継承問題および神代卷理解における吉田家との相違について考察。前者に関しては、吉田神道護持を目的とした吉田家と、皇孫守護・国家発展に奉仕する使命を信念とした惟足との価値基準の相違が、返伝授不履行に至ったと説く。後者については、惟足が公開的の神代卷講談を重視することによって、神道思想の発展や普及に貢献したと指摘し結んでいる。

第四章は、会津藩主保科正之の神葬祭をめぐって、惟足の葬祭論について考察。正之は死後自らの葬儀を神道式で行うことを遺言した。寺請制度が「大法」と認識されていた時代、惟足は老中を説得して仏教色をすべて排し、神道式葬儀の執行を実現した。また惟足の死後観や靈魂観についても、論じている。

第五章は、惟足の神籬磐境の伝をどのように解釈すべきかについて考察したもので、先行研究者の多くが取上げたテーマである。論者はその要諦を、人論の第一とされる忠君と捉える従来の学説をある程度認めながらも、高皇産靈尊の神勅に基づく「皇孫のための奉斎すなわち天下太平の祈り」とする。しかも天下太平の祈りには君臣関係のみならず、民にも向けられる。その証拠の一つに、「君をあがめ民を隣む心こそよろづの道のもととなりけり」という惟足の歌など挙げている。

第六章は、惟足の八雲神詠歌「八雲立つ…」の解釈および詠歌に関する考察である。八雲神詠を和歌の起源とし、「八重垣を」の反復を「敬（つつしみ）」の意

識と結びつけて解釈する。また詠歌に関して惟足は、和歌の秘伝を四重奥秘に次ぐ三事伝に位置づけ尊重。歌の役割を神々と人々との交流の手段とし、自らも和歌を土地の神に奉納し、日照りや洪水の被害から救われたと言われ、熱心な神道信仰者としての一面を指摘している。

第七章は、惟足の「神語」理解と詠歌について考察。「神語」を神が直接語つたものと捉え、神詠歌や託宣および神代卷の記述もすべて「神語」の価値あるものと認識していたという。またまことの心をもって詠まれた歌も、神々との交流手段になると説いている。

第八章は、惟足と「山崎闇齋の神代卷解釈の相違についての一考察」と題して、両者の類似点や相違点を論じている。先行学説を例示しながら、類似点としては「土金の伝」、相違点として惟足の「天人合一」と闇齋の「天人唯一」を挙げる。惟足の「天人合一」と闇齋の「天人唯一」とは似て非なるものと主張。惟足は敬（つつしみ）をもって、人の根源に遡及することにより天人合一の境地に

至ると言い、闇斎は天と人との直接的同一性が認められ、神に対する絶対的信念が強調されていると説いている。

第九章は、惟足が中世と近世神道思想の端境期に位置づけられることを考察。中世神道思想を「祈り」を主体に、近世神道思想は「道」を主体に構築されたという先行学説を参考にすると。惟足は吉田神道の最高奥秘・神籬磐境の伝を継承したが、その根幹は皇孫奉斎・天下太平の「祈り」であった。一方平天下の道を神代巻から説く吉川（理学）神道は、「道」の探究に係る思想と言える。それ故惟足は、中世・近世神道思想の端境期に位置づけられると結ぶ。

終章においては、本論の成果および今後の課題について述べている。論者が主な成果として挙げるのは、以下のような点である。惟足は神道を治国平天下の道として捉え、「君臣の道」や「忠君」の考えを採り入れたというのが定説に近いが、論者はそれだけでは不十分で「民を隣む」心の重要性を追加すべきと主張。また惟足の神籬磐境の伝解釈には「皇孫奉斎すなわち天下太平の祈り」と「祈

り」の語が重視されており、中世神道思想の特色を有していたこと。およびこれまでやや等閑視されていた惟足の詠歌や神詠歌の解釈を通して、惟足思想分析に採用したことなどが挙げられる。

今後の課題として、本論が惟足の神代巻解釈を中心に考察したので、「中臣祓詞や『神道大意』等を素材とした研究。あるいは同時代の伊勢神道家・度会延佳や理当心地神道の林羅山および林鶯峰達思想との比較研究などの必要性を述べる。なお「付記」には惟足の詠歌を集録掲載している。

論文審査の結果の要旨

はじめに、本論文が吉川神道の研究に裨益するであろう点を、二、三述べてみたい。

江戸時代初期神道家として活躍した吉川惟足は、当代一流の諸大名・徳川頼

宣、保科正之、津軽信政らに招聘され、神道の講義を行なった。諸大名を魅了する神道論を展開した惟足という人物や思想について、第二次世界大戦以前から今日まで少なからぬ研究がなされてきた。先行研究者の多くは、何故惟足の神道思想を諸大名達が受け入れたかという点に、関心を抱いたのは当然と言えよう。惟足自身も中世神道を「社人の神道」、自ら提唱する神道を「理学神道」と称し明瞭に区分した。そのため先行研究者は、惟足が継承した吉田神道の最高奥秘・神籬磐境の伝理解において、「君臣の道」「忠君」「絶対的忠」など封建教的概念で捉えようとした。これに対して論者は、神籬磐境の伝の要諦は、「君臣の道」の主張をある程度認めながらも、「皇孫奉斎すなわち天下太平の祈り」と理解すべきことを強調する。その意味で、論者は惟足を「道の神道」の探究者として把捉する従来の学説を必ずしも容認せず、吉田神道道統者としての立場を墨守した思想家と位置づける。

このように、惟足の神道思想の特色を中世神道思想のそれと結びつける論者の

姿勢は、第一章の『日本書紀』神代卷尊重論にもみられる。惟足は漢字の訓や仮名および「日本古来の発想」を重視する古典解釈法をとり、本居宣長の方法と類似しているにもかかわらず、吉田神道の根本枝葉花実説的考え、神道が根本で儒教が枝葉であるとして、儒教的概念を容易に採用したという。また第二章で論じている神代卷解釈における「未生已生論」の利用も、中世伊勢神道の「機前」の概念の踏襲と指摘するなど、中世神道思想とのつながりを主張している。

第二の点は、惟足の詠歌や神詠歌の解釈に注目したことである。惟足の学問への関心は詠歌から出発し、歌学を通して神道古典に触れて、神道古典解釈に辛苦しながら神道の内実を構築しようとした。このような学問の履歴を考えると、惟足の神道思想の形成上、歌に関する検討はたいへん重要と思われる。しかもこれまで惟足の詠歌や神詠歌の解釈と惟足の思想形成上のつながりを考察した論は、ほとんどみられなかったと言えよう。そこで論者が指摘する具体例を示すと。惟足は神籬磐境の伝の解釈を「皇孫奉斎すなわち天下太平の祈り」と捉えたが、そ

ここには君臣関係のみならず庶民の平穩も含むと主張。その証拠の一つが惟足の詠歌「君をあがめ民を隣む心こそよろづの道のもととなりけり」である。また有名な八雲神詠歌の中の「八重垣を」の反復に対して、惟足が最重要徳目と主張する「敬（つつしみ）」の意識と結びつけて説いていること。および歌は神々と人々との交流手段と捉えている点などが提示されている。以上のような歌と惟足の神道思想形成上のつながりは、わかり易い論と評価できる。

第三の点は、本論文の主題である吉川神道の研究を、神代卷の解釈を中心に進めたことである。惟足が『日本書紀』神代卷を典拠として、思想形成を企図したことは周知の事実であろう。但し道統継承問題や神道式葬祭論を神代卷解釈を中心に論じ、説得力のある考察をした点は評価される。吉田家への返伝授不履行問題は、客観的には惟足にとって大きな過失と言われても止むを得ない事件であった。しかし吉田家が惟足の神代卷講談を軽視したり、神代卷の価値共有を拒絶する限り、返伝授をすべきではないという説もあり得よう。また保科正之の葬儀に

において、仏教色をすべて排し、神道式葬儀を実現するのに活躍したのが惟足であったことは、良く知られている。一般的には保科正之の葬祭は、吉田流の神葬祭の影響と言われるが、根幹のところでは神代巻に基づくと主張は、有意義である。

以上、細かな点は省略して、三点に整理した。しかし第一の主張である惟足が中世・近世神道思想の端境期に位置づける説については、是非の判断がたいへん難しい。けれども今後の課題として論者が述べている。「中臣祓詞」や『神道大意』等を素材とした研究、あるいはほぼ同時代の神道思想家・度会延佳や林羅山等との比較研究によって、解決への道も期待されよう。

以上のような課題が残されているが、本論文の申請者徳橋達典は、博士（神道学）の学位を授与せられる資格があると認める。

平成二十四年二月十六日

主査	國學院大學大学院客員教授	安蘇谷 正彦	⑩
副査	國學院大學教授	武田 秀章	⑩
副査	國學院大學准教授	西岡 和彦	⑩